

学部の壁を越えた混成型授業で 大学の核となる教養教育を構築

リベラル・アーツ

武蔵野大学

武蔵野大学の1年生は、全員が武蔵野キャンパスで共通課程を学ぶ。核となるのは、他学部仲間と共に7分野の学問を順に学ぶ教養科目だ。新キャンパス設置による一体感喪失への危機感を背景にカリキュラム刷新にあたっては、学内体制から見直しを図った。大学で学ぶ「知」について考えるきっかけを新生に与えている。

専門課程同様の授業水準で 知のインパクトを与える

武蔵野大学は東京都内の武蔵野と有明に2つのキャンパスを持つ。2年次以降は学部・学科によってキャンパスが分かれるが、1年次は全員が武蔵野キャンパスで学ぶ。2010年度から、初年次共通基礎課程「武蔵野BASIS」を全学部必修として課している。同大学には、教養担当の専任教員が所属する「教養教育部会」が、各学部と並ぶ組織として存在する。この改革は、学部ではなく同部会が主導した。

「武蔵野BASIS」の目的は、専門課

程を学ぶため、また社会を生き抜くために必要な「自己基礎力」を身に付けることだ。「建学科目」や体育の「心とからだ」、コンピュータやレポートの書き方に関する「学問を学ぶための基礎」、英語を中心に学ぶ「外国語」、教養やキャリア開発をテーマとする「自己理解・他者理解」の4カテゴリからなる。うち複数の科目で、学部・学科混成のクラス分けがなされる。

「武蔵野BASIS」の中核は、「自己理解・他者理解」カテゴリの科目「基礎セルフディベロップメント（リベラル・アーツ7科）」（以下、基礎セルフ）。約60人のクラス編成で、哲

学、現代学、数理学、世界文学、社会学、地球学、歴史学の7テーマのいずれかからスタートし、3週間ずつ順番に学ぶ（図表1）。1回の授業は2時間連続。1時間目は講義、2時間目はグループワーク。異分野の学生との議論、協働を通して成長を促す。

成果発表のある最後の6週間は、グループワークに特化した授業になる。7分野からグループごとに興味のある1分野を選び、自由にテーマを決めてA4判8ページの資料を作成し、プレゼンテーションをする（図表2）。

授業名の「セルフディベロップメント」には、「自分の知を開発する」とい

【図表1】基礎セルフディベロップメント（リベラル・アーツ7科）で学ぶ分野



※7つのテーマを虹の7色に例え、7色の頭文字「VIBGYOR」をクラス編成に用いている。それぞれの頭文字（色）に5つずつクラスがあり、その5クラス単位でテーマを渡り歩いていく。したがって学ぶ時期は、どの頭文字（色）に属するかによって異なる。上記はVクラスの場合の例。

【図表2】成果発表のために学生が作成した資料



う意味が込められている。当時、教務部長として「武蔵野BASIS」開発の中心的役割を果たしてきた久富健教授は述べる。「学生に自由に科目を選ばせると、自身の専門に関連する科目か、単位修得が楽な科目に偏りがちだ。だが、一生に一度は未知の学問分野に触れて知の世界を広げることが、教養科目の本来の意義ではないか」。中世ヨーロッパにおいて必須の教養とされた自由七科*1をモチーフに、全員が7つの分野を学ぶ授業方法を採用した。

「基礎セルフ」の授業は、教養教育部会の教員だけでなく、学部専任教員や、意欲的な非常勤教員も担当する。教養と専門の間で教員の交流を図るため、適任者を教養教育部会と各学部で選んだ。各分野に教員が5人ずつ配置され、35クラスに分かれて学生は学んでいる。授業の内容は教員に任されているが、内容の水準を1年生向けに下げないという方針を共有。例えば久富教授の哲学分野の授業では、1時限目にデカルトやパスカルの原書を読んで聴かせて解説を加え、2時限目に自身がデカルト的な人間かパスカル的な人間かを話し合わせる。

多くの学生は高度な内容に苦心するが、「それが目的だ」と久富教授は言う。「大学の教養教育が崩れた原因の一つは、学生にあわせて学びの水準を下げたこと。本物の教養をドカンとぶつけて、大学の勉強は高校までとは違う、と実感させたかった」。同時に、厳格な出欠管理、マナーの徹底、ノートの取り方の指導などを通して、大学で学ぶための基本的な態度も身に付けさせる。能動性など授業態度も含めて成績を評価し、単位を修得できなければ進級させない。リセットして1年次を

再スタートすることになる。

2年次には「発展セルフディベロップメント」として、基礎セルフの7分野に対応した15科目を開講。うち2科目が選択必修となっており、学生は関心を持った分野をさらに深める。

他学部との共同履修が受験生にとっての魅力に

「武蔵野BASIS」は実施6年目を迎えて、さまざまな面で着実に成果を挙げている。

一つは学生募集への好影響だ。多くの学部で「武蔵野BASIS」の存在が志望理由の上位に入っている。特に、カリキュラム上の制約がありながら率先して参加した看護学部は、他学部生と共に授業を受けられる点がアピール材料になっている。

また、授業が厳しいため、不本意入学や進路変更の学生は1年次に大学を去り、2年次以降の中退率が大幅に低下。大学全体の中退率も低下した。他学部にも友人ができるなど学生同士の交流が活発になり、孤立を防ぐ点にも寄与していると考えられる。

学部の教員からも、「2年次以降のゼミ形式の授業でスムーズに議論が行えるようになった」と学生の成長を実感する声が挙がっている。

新キャンパス開設を機に教養教育を全学共通化

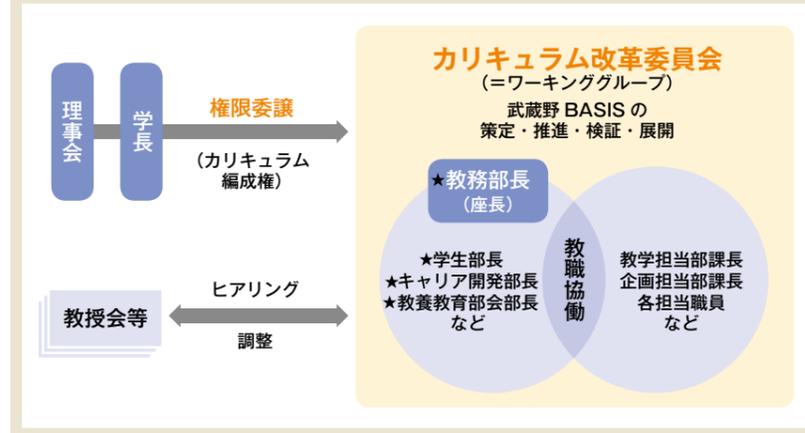
同大学の教養教育改革の端緒を探ると、1990年代後半に行き当たる。学部増（1998年度以降、8学部増）、女子大学からの共学化（2004年度）による総合大学化を見据えて、当時の法人

と教員は「複数学部を持ちながら全学的な特徴を打ち出すには教養教育がカギになる」との認識で一致しており、2000年度に教養教育部会を再組織化。各学部共通科目担当の専任教員を所属させ、全学的な基礎教育の構築を検討し始めた。改革の直接的なきっかけは、2012年度の有明キャンパス開設決定にある。学部単位で行われていた教養教育を全てリセットし、1年次に1つのキャンパスで集中的に全学共通の基礎教育を行う現在の形をめざすことが、2007年頃に確定した。

この形が採択された理由は複数ある。まず、大学としての一体感を保つため。学部・学科でキャンパスを完全に分けてしまうと、分離した「2つの大学」となるという懸念があった。また、従来の「1・2年次が教養、3・4年次が専門」というカリキュラムは、専門が本格化しないまま教養が2年間続くことになり、「2年次にモチベーションが落ちる」「就職活動のため専門を十分に学べない」といった問題があった。1年次が専門教育を受けるための準備期間であることを明瞭にするため、学生に対しては「教養科目」という名称は使わず、アカデミックスキルを身に付ける科目やキャリア教育科目を含め、「基礎課程」と括ることにした。

内容面の検討にあたっては、知識注入型の授業から脱却し、学生にとって生涯役立つ「生きる力」を育てることがコンセプトになった。久富教授は当時、ある企業のトップから「企業側は大学生の学力にまったく期待していない。最初から、入社後に再教育をするつもりで採用している」という話を聞き、大きなショックを受けたという。在学4年間で、企業人をうならせるよう

【図表3】武蔵野BASISの計画・運営体制



な魅力を備えた学生を育てたい、その土台となる基礎課程にしたい、との思いから、「武蔵野BASIS」「自己基礎力」という名称と考え方が生まれた。

学長直属の委員会が各学科と議論を重ねる

「武蔵野BASIS」の具体的なカリキュラムの策定は、2008年度からの2年間でなされた。推進母体となったのは、教授会の上位に立つ意思決定機関として学長の直下に設けられた「カリキュラム改革委員会」だ（図表3）。教務部長が座長を務め、全4部長（図表★印）と複数の職員が委員となった。理事長と学長は同委員会にカリキュラム編成権を委譲。50回以上の会議を経て、実施内容と教員の配置を固めた。

2010年3月に全学部教授会の同意が得られるまで、委員会は各学部・学科とミーティングを重ねた。それまでは教養科目の内容、教員配置は各学部で決め、非常勤教員も学部で採用していた。それが一転して、各学部が管轄していた教養科目のほとんどを廃止することになる。話し合いは一筋縄ではい

*2 収容定員増認申請中、届出書類提出中

カリキュラムが実現した。

新たな入試方式に基礎セルフの理念を反映

2015年度入試からは、「武蔵野BASIS育成型入試」を実施している。受験生は8月のオープンキャンパスで、「基礎セルフ」と同じ2時限続きの授業を受講。各学部の教員がグループ学習の様子や提出課題を見て、「育てたい」と思える受験生を合格させる。「セルフディベロップメント」の趣旨を高校生に理解してもらうとともに、入学後にグループワークをリードしてくれる人材を入れて、「基礎セルフ」や学科のゼミをより活性化させることを目的としている。

同じく2015年度から、第2次カリキュラム改革の一環として4学期制が導入されている。学期ごとに授業を完結させるために2時限連続の授業が増えたが、学生は「基礎セルフ」でこれに慣れており、教員の予想以上に集中力が持続しているという。

課題の一つは、専門課程のカリキュラムとの連携だ。2015年度以降に実施予定の全科目のナンバリング作業で、基礎課程、専門課程、留学、インターンシップなどを交えた学びの動線をつくっていく。

今後の改革の柱は「グローバル教育」。2016年4月にはグローバル学部が開設予定*2で、同学部のグローバルビジネス学科は、英語でビジネスを学び、オールイングリッシュで卒業できるという特徴を持つ。これに歩調を合わせる形で、「武蔵野BASIS」でも独自のグローバル教育の準備を進めている。